

コラム

留学生ローカル事情

この欄ではいつも新鮮な御意見が開陳されていて、研究論文以上におもしろく拝読させていただいていますので、気が引けるのですが、最近話題の留学生の事情を現場からお知らせ致したいと思います。

中曽根前内閣の留学生10万人計画にしたがつて現在全国で約2万人の留学生が勉学中で、その数は年率25%の割で急増しています。私の所属する東京大学では国立大学で最大、約1300人(59か国)の留学生が学んでいます。そのうち工学部では約470人(修士120人、博士240人、その他110人)、金属関係では33人が滞在しており、最後の数字は1年の修士定員と全く同じです。内訳は修士5人、博士15人、大学院研究生11人(大学院入学前の予備生で、4月からはほぼ全員大学院に入学します)、研究員2人です。博士課程の学生数は全部で34人ですから、ほぼ半数が外国人です。この点はアメリカの大学に近くなつたのでしょうか。出身地の85%は漢字圏で、中国(含台湾)と韓国が半数ずつを占めています。

このうち約1/3弱の人は現地の大使館ないし本学での厳しい選考を経て日本国政府の国費留学生となつた人で、毎月約18万円給費された上、授業料も免除、

さらに日本語の教育システムも完備していますので、日本人博士学生が育英会から毎月8万円貸与されているのに比べれば後者から不満が出るぐらい好遇されています。これらの学生はさすがに優秀な人がほとんど。このままいくと大学の中枢研究が留学生に負うことになるかも知れません。一方これ以外の方は私費留学生といわれ、各種の奨学金、仕送り、アルバイト等で生計を立てており、新聞誌上で御存じのとおり苦学しています。このためか仕事ぶりの方もばらつきが大きいようです。

学生側からの不満は経済的なことを除けば言葉や育つた環境の違いのせい、指導教官や周囲の日本人との意志の疎通を欠くことのように聞いております。

大学行政上は大部分の留学生が特別選考を経て定員枠外で入学しますので、国からの特別な経費の支給はない上、場所がだんだん不足ぎみになつていくことで、私どもが、国以外からいただく各種の奨学寄付金も、経理の規則から苦学している留学生に奨学金として支払えないことも、欧米諸国と違つた問題点です。いずれにしても大学は留学生を通じて急速に国際化しており、このための付加業務に教員、事務員ともども忙殺されています。(東京大学工学部 佐野信雄)

編集後記

編集委員になつて約10か月たちました。ちょうどその頃受け付けられた論文が、この号に載せられています。つまり、投稿された論文が掲載されるまでの1サイクルを経験したことになります。これまで読む側、あるいは投稿する側から見てきた「鉄と鋼」を編集側から見て、特に印象づけられたのは、編集関係者が全員、投稿された原稿をできるだけいいものにし、すこしでも早く掲載されるようにと一生懸命になつていくことです。編集委員長は掲載までの期間をさらに短くするよう努力することを指示されています。

わかつてくださいね、この努力を!

最近雑誌ブームで今年も雑誌がいくつか創刊されました。雑誌を魅力あるものにしていく要素は何でしょうか。本屋で雑誌をパラパラとめくつてみた時、買ってみようという気持ちにさせる要素の一つは、読みたいと思うことが、新鮮でかつ刺激的に表現されてい

ることではないでしょうか。

「鉄と鋼」はこれら商業誌と性格が違つていても、魅力的ならしめる根本原理は似通つていると思います。そのためには、まず、新鮮なテーマでいい論文を書いて投稿していただきたいことは言うまでもありません。新鮮はいいとしても刺激的に書くのは論文としてはむつかしいと言われる諸兄がおられるならば、「寄書」という便利なカテゴリーがあることに注意を喚起したいと思います。

今、「夢のあるテーマ」をみんなが求めています、それは寄書欄から生まれてくるような予感がします。

オピニオンを発表する場として気楽に諸兄が寄書欄を利用していただくこと、それが「鉄と鋼」に新しい魅力を加える一つの方法ではないでしょうか。

投稿をお待ちしています。(H.K.)